

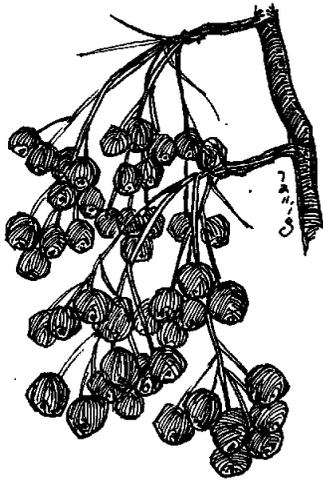
産業の発達と自然保護

井 手 賁 夫

十九世紀の中葉、文明が進歩し、大都會が発達し、工業と機械化とが進んでいわゆる産業革命の時代にはいると、それまでの自然風景が急速に荒らされ出したので、これまでの美しい自然を守ろうとする運動がヨーロッパの各地におこってきた。

また一方、爛熟した都会文明の弊を健康で美しい自然に接することによっていやそうとして、ルソーの「自然に帰れ」という呼び声が再び高まり、それらがさまざまな形の運動となつて生まれてきた。田園都市の建設、美化運動、さらに二十世紀の初頭にかけては菜食運動、裸体運動というようにな形にまでなつた。山岳会、徒歩旅行会などというものもこうした時期に形をととのえてきたものである。

しかし森林保護はもっと古い時代に、す



でに、初期の機械工業時代からいわれていいた。伐採の行きすぎや盗伐を防ぐために、森林監督官がその職務をもつていたのはすでに古くからであるが、それらはいよいよ貴族領主の城園や狩猟地の保護が目的であったのである。今日でいう自然保護の最も古い形は、「フォンテンブローの森」で、これは一八五三年に当時のフランスの識者たちの運動で法律的に保護されるにいたつた。国立公園としても古いものはアメリカ合衆国の「イエローストーン公園」で、一八七二年、自然の風光をそのままに保存し、公開の公園として一般大衆の保養と健康の場所として役立たせようとしたものである。

こうした気運にのつて、一八八〇年から第一次世界大戦にいたるまでの間に、ヨ

ロッパ各国にぞくぞくと自然保護のための団体が生まれ、その指導と活動のもとで、数多くの天然記念物、自然保護地域が地理学的、動物学的、植物学的観点から設定せられるようになった。

ドイツに自然保護協会が設立されたのは一九〇九年十月でミュンヘンに誕生した。そしてスイス、オランダでも全く同じ時期に同様の協会が発足した。面白いことに日本の最初の国立公園が誕生したのが一九一〇年、すなわち明治四十三年である。この年、第二十八帝國議會に「日光ヲ国立公園トナスノ請願」が日光町長から提出されて採択された。

これはもちろん、ヨーロッパ文化を吸収するの熱心であった当時の識者とその影響をうけたものであろう。当時は、前述のようにヨーロッパに自然保護運動が盛んなときで、詩人ヘッセが自然讃歌の小説「ペーター・カーメンチント」(訳名「青春彷徨」)または「郷愁」を出して、一躍ヨーロッパ文壇にその名を知られたのが一九〇四年であった。

こうした一般的な風潮が国際的協力となつて形をもつたのは、まず一九〇二年、パリに開かれた動物保護のための国際會議で、一般的な自然保護の會議は一九一三年スイスのベルンに十八カ国の代表が集まっ

て開かれた。一九一四年から一九一八年にわたる第一次世界大戦中はもちろん何らのこうした活動は行なわれなかったが、第一次大戦後には一九二二年にロンドンに国際鳥類保護会が設立されている。

こうして、に各国の自然保護運動が活発になって、各国ともに自然保護のために政府の役人が任命されるようになってきた。そして一九四六年のバーゼル、一九四七年のブルンネンの予備会議を経て、一九四八年にフォンテンブローにおいて「国際自然保護連合」が誕生し、爾後四年ごとに国際連合の総会が開かれて、国際的な視野から問題の解決に努力している。

またユネスコでは、アフリカ、東南アジア、インドネシアなど低開発国に対して予算を計上して、そこにある自然を保護するために種々の実際的努力をしている。

このように自然保護の重要性は国際的な問題となっているが、それがまた具体的にどれほど重要視されているかということはたとえば、イギリスやオランダの自然保護協会の会長が女王であるという事実がもっともよく示している。

私が出席したドイツの総会にも、首相が出席して、晩餐会を開くというほどであった。じっさいにヨーロッパに行つて見るとどの都会でも街路樹がじつに大きく成長し

ていて、また都市のすぐそばにじつによく森林が発達しているし、しかもその森林には鹿の姿を見ることがしばしばである。

したがって工場を設置するに際してもその周辺との関係、自然の保護ということには非常な関心が示されていて、たとえばドイツの炭鉱地帯の人にあつたときも、その地方の緑の保持、また周囲にある美しい自然を非常に得意に話していたことを記憶している。

§

アメリカではヨーロッパの影響もあつてあの広大な面積を有するにもかかわらず早くから自然保護には力をそそいでいて、国立公園の設立という点ではアメリカが一番古いし、その広大さ、その管理のゆきとどいていけることでは最も進んでいる。しかもなお今年二月には、ジョンソン大統領が国会にあつて「自然美に関する大統領教書」を発表して、都市、田園、ハイウェイ、河川、大気などの美化をはかるために国として積極的の資金面においても、法律によつても、適切な措置を講ずることを訴えている。その冒頭で、大統領はつぎのように述べているのである。

「急速な都市化とその成長は、すでに多くの米国人から適当な環境に生活する権利を奪つており、より多くの米国人は都市

内に蟄集して大自然から隔絶されている。都市そのものが田園地方に伸張し、伸張したがって小川の流れや、樹木、牧場を破壊しているのである。近代的ハイウェイは一マイル伸びるごとに五十エーカーの公園に相当する地域を消滅させている。そのため人々は自然に接しようとする都市外に出て自然はそれよりもさらに後方に後退しているという事実を見出すだけである」といひ、工業技術についてつぎのようにいつている。

「われわれの生活に得るところの多い近代工業技術も、暗い片面がないとはいえない。工業が無制限に排出する残滓は、われわれが住む世界、われわれの慰安、われわれの健康に脅威を与えている。呼吸する大気、飲料水、われわれの土壌、野生の動物や化学成分によつて害をおおつており、廃棄された自動車の残骸は田園地方に散乱している。これを統制する責任は、ひとつの共同体として工業の恩恵をうける社会が負うべきである」と説いている。

それでは、産業の発達と自然保護とをどのように調節すべきかということになってくる。ことに、北海道のように広大な自然がなおじゅうぶんに残っているようにみえ

るところでは、少々自然を破壊しても大局としては産業が発達すればよいではないかということが考えられやすい。

ただ注意しなくてはならないことは、人間はとかく実利にのみ走り易いので、目前の利益だけを考えるとそのほうが大事であるが、永い目でみると自然保護のほうが大切である、ということががずいぶんある。ではその間の重要さの比較ということになると、これはなかなかかわらないのである。アメリカ大統領の教書の中にもこう書いてある。

「自然美は数値的に測定しにくいものである。国民総生産額や週間の小切手支払額、あるいは損益計算書にあらわれるものではない。これらのものはそれら自身が究極の目的ではなく、人間が満足と喜びと、よい生活にいたるためのひとつの過程なのである。しかし自然美は、このような究極の目的へそれ自身直接貢献するものである。したがって自然美は、真の意味における国民所得のうちでも最も重要な構成要素のひとつであつて、統計専門家がその価値を計算できないということだけのために放置すべきものではない。

自然美について、われわれにわかつていこともいくつがある。自然美に接することによって人間の想像力は広められ、精神

は活力に満ちてくるが、醜悪はその中に生きている人間を卑しくするのである。米国人の日常生活において、見るものが魅惑的なものであれば見る人の生活を質的に向上させ醜悪なものであるときは見る人の存在価値を低下させるのである。

そのほかにも自然美は直接的な価値あるものであって、健康への直接的な危険を除去するとか、あるいはハイウェイ交通の単調さと危険を救うことにより、安全性に対して寄与するものである。植物が枯死した汚れた環境のうちに住む人々は、より一層の精神的な不安や精神的疾患に冒されやすいということも、われわれの知っているところである。醜悪は大きな損失をもたらすものである。煤煙で汚れた建物をきれいにする、あるいは、新しくレクリエーションのための地域を設けるには多くの費用が必要である。これに対して、かつてそこにあった自然の風景は、保存しようとしさえすれば、はるかに低廉な費用でできたはずである。

こういうことは言葉ではわかっていても、いざじっさいにある工場を建てたのに、自然の美をどのように考慮するかということでは非常に経費のちがいが出てくると、現実的にはなかなか難しいことである。

先日、あるドイツ人が有名な景勝地を見

てきて、美しい海岸に工場の煙突がそびえているのが大変目ざわりだった、といっていた。それがどういふ状況なのか私は自分で見ていないから分らないが、もし工場をもうすこし離して建てるとか、丘のかげにでも持つて行くことができれば、風景を害することはなかったらう。しかしそれには多大の経費がかかることも知れない。

が一方、そういう工場とか会社とかの損得ということは、いわばその時の一時的なことであるから、その費用については公共機関がなんらかの方法をこうずるとか、国が低利の金融をするとか、そういうこともその自然の重要性によって必要になってくると思う。いずれにしても自然というものは、一度こわしてしまおうと戻しつかないものである。大統領教書は、この点についても非常に積極的である。

「われわれは田園地方を保護して破壊から救うばかりでなく、いまままでに破壊されたものを復元し、都市の美と魅力をと戻すべきである。われわれがとる保護策は昔ながらの保護と育成だけではなく、復元と革新の創造的保護であるべきである。その対象とするものは単に自然のみならず、それを囲むところの世界との間のあらゆる関係も対象とし、その目的は単に人間の福祉の追求のみならず、人間の精神の威厳の保

持をも目的とするものである。この保護策で主な役割を演ずるものは、人間が自然の美と接する機会を維持し、高揚することである」

これは自然の美が休日だけに楽しめるといふのでなく、日常生活の一部となるべきことを意味しているのであって、新たな都市づくり、生活環境の美化をさしているのである。

§
さいごに、北海道の観光施設について一言話をしたい。

いうまでもないことであるが、北海道の風景の特徴はその広大な原野、あるいは茫漠とした湖沼、その他その原始性にあるのである。そして本州から訪れるほとんどすべての観光客、また私が最近案内した幾人かの外国人たちが嘆賞するのも、そういう原始性なのである。

そこで観光施設を設けるばあいに、この原始性を失うような施設をつくってはならないのである。もちろん、道路も宿泊設備も必要である。そしてそういうばあいの設備は、一方に第一級のものがあるとともに大衆のための低廉な施設がなくてはならない。しかしこのばあい、低廉といつても、それは粗悪な安宿という意味ではなく、ユース・ホステルのような質素ではあるがじ

ゆうぶん快適な設備がなくてはならない。道路も、すくなくとも国立公園くらいはすべて舗装されていなくてはならない。先日もあるドイツ人を支笏湖へ案内したときに、舗装していない道路のところへきたら、ヨーロッパではこういうところでは車から降りる、といった。札幌市内でさえちょっと横へはいるとひどい悪路なのだから現在のわが国ではまだまだこれからのことではあるが、しかし一般的にいって、設備はすべてじゅうぶん程度の高いものではなくてはならない。しかし、ここで特に注意すべきことが二つある。

一つは、設備は完全でじゅうぶんではなくてはならないが、それはある限られた区域だけで、一步その外の自然はできるだけその原始性を保っていないとほならないということである。スイスの有名なアイガーの北壁の下に、グリンデルワルトという小村がある。登山者にとってはメッカのように思われているところで、ホテルは第一流のホテルからユース・ホステルのようなものにもいたるまで完備している。道路はもちろん主要なところは舗装されていて、いかにスイスらしい清潔な美しい道路である。しかし一步山道へはいると全く自然のままである。グロースシュレットホルンという大きな山があつて、その氷河へ通ずる道

など、これはアイガーの北壁のような難しいところではなく、一般の登山者が誰でも行ける道である。

しかし、グロースシュレックホルンの氷河の末端の上のアイガーの東壁と向かいあった——この東北の壁は、楨さんが当時五十年ぶりに初登はんしてその勇名をとどろかせたところであるが——切り立った崖の上の細道で、いかにもアルプスの小径を歩くとといった感じの道であるが、そこを通って氷河へ行ったその帰り道、思いがけなく相当な滝にぶつかって驚いたことがある。行きにはなかった滝が、しづきをあげて道の上に落ちていたのである。

考えてみると午後になって暖かくなったので、その上の雪溪か氷河か何かの一部の融水が流れ落ちたのである。雨でも降って水量でも増したら通れないだろうとガイドにきくと、そのとおりだ、というのである。引きかえして、氷河のそばにある小屋へとまるかどうかするより仕方のないところである。しかし、そんなことは山の中では普通のことである。通れなくなれば引き返せばよいのである。そんなところを直すのに金をかける必要はないことで、自然はそのままにしておくほうがよいのである。

グリンデルワルトにもリフトがある。日本人なら早速氷河の上かアイガーの途中あ

たりへリフトをつけるかも知れない。しかし今いったように、アイガーやグロースシュレックホルン、ウェッターホルンや、そういう一連の山のほうにはそんな設備はない。それはこういう一連の山の向かい側の丘の上につけてある。

一体日本では、登るべき山そのもののヘリフトをつけたがる。しかし、それはまちがった考え方である。山登りをする以上はそのかくごで登るべきで、物見遊山に行くべきではないのである。そういう気楽なビクニックをしたい人のためには、むしろ立派な山の向かい側につけるべきである。登山をするのではないならば、その山の中まで上ったって、何もその立派な山そのものは見えはしないのである。立派な山を見ようと思えば、その向かい側の山に立つのが一番賢明な方法である。

グリンデルワルトのそのリフトも高山の向かい側につけてあって、そこに登るとアイガーの岩壁や、その他の山々への眺望がじつに立派である。そして夏ならば、その奥の池のほうまで歩いて行って釣りをすることもできるし、立派なホテルもできている。しかしこのばあいにもそのホテル一軒だけで、そのほかにはこまごました設備は

何もない。こういうことは、やはり北海道の観光設

備を考えるばあいに非常に大切なことであって、設備をつくる以上は立派なものをつくる。しかしそれ以外のところは、できる限りそのままにしておくことが大事である。

外国の例ばかりあげるが、それも結局は外国に範とするに足るものがあるからであるが、ヒットラーの山荘があったベルヒテスガーデンというところがある。その山の肩のところまでケーブルがついている。ケーブルをおりたところには立派なホテルがあつて、その前の広いテラスにはテーブルと椅子が並べられて、そこから遠くにひろがるアルプスの連山がひろびろと見わたせる。

人々はそこで静かに談笑しつつ飲食しているが、騒々しい物音や音楽の高い響きなどはすこしも聞こえない。そこから近くの山頂へ道がついているが、それはせいぜい三尺幅の、人ひとり通るのがやっとの道で片側はがけになったその道をすれちがう人々がたがいによすり合うような道である。ほんの二、三十分も登れば頂上であるが、これなども、人の憩うところの設備はつくることが、それ以外のところはできるだけ自然のままに残すという一例である。

なお、山のリフトなどのことで考えなくてはならないことは、スイスの山と日本の

山とは全く条件がちがうことである。日本の山ならばどんな上まででも設備ができて歩かまわることがじつに容易である。大雪山などもユコマンベツから姿見の池までリフトができると、そこから旭岳から黒岳へ行く道など、元氣さえよければ郊外の散歩とあまり変らないくらい気軽にできる。

しかしスイスのばあい、たとえば有名なユングフラウヨッホまで、この約三千五百メートルくらい上まではじつに簡単に行ける。おりたところはしかしホテルの中である。そのホテルの露台まで行くと、眼下に雄大なアレッツチ氷河が展開する。しかし一歩ホテルから外へ出ると、もう膝まで没するような雪の中である。そこからさらにユングフラウの頂上へ行くには、岩と氷に立ち向かわねばならない。これはもう完全装備をして、ガイドでもつれて行くよりほかはどうしようもないのである。そういう点でスイスの山は、どんなに設備をしても自然に守られているのであって、日本のばあいは大変ちがうのである。

それだけに日本の山に設備をつけるばあいは、いっそう自然をそこなわない注意が肝要なわけである。